

## 〔論文〕

高等学校「総合学科」における  
普通科目と専門科目の有意性の認識

—卒業生調査に基づく実証的研究—

岡部善平  
(小樽商科大学)

1. 問題の設定
2. 調査の対象と方法
  - (1) 調査対象と方法
  - (2) 調査対象校の概要
3. 分析の視点
4. 調査結果
  - (1) 普通科目と専門科目の間の境界
  - (2) 選択制カリキュラムにおける「一般有意性」と「専門有意性」
5. まとめと課題  
(Abstract)

## 1. 問題の設定

本研究の目的は、大幅な科目選択制を導入した高等学校「総合学科」の卒業生が、自らの経験した選択制カリキュラムに対していかなる意味を付与しているのかについて、とくに普通科目と専門科目の有意性 (relevance) <sup>(1)</sup> に関する卒業生の認識に着目して、実証的に検討することにある。

1980年代末以来、「多様化・個性化」を理念とする高校教育改革が進展してきた。具体的には、総合選択制高校、総合学科、単位制高校の創設、「特色ある学科・コース」の増加などに見られるように、学科・コース・科目においてさまざまな教育内容を提供し、何らかの形で個人にそれらを選択させる仕組みを作ることを通して、多様化の実現が試みられている。とくに総合学科は、普通科と専門学科という枠にとらわれない幅広い選択科目を開講し、履修すべき科目の多くを生徒自身が選択していくというシステムをとっており、1994年の開設当初から高校教育改革のパイオニア的役割を担ってきた。

これまで総合学科に関しては、そのもっとも大きな特徴である「生徒自身が科目を選択していくシステム」、すなわち科目選択制について研究の蓄積がなされてきた。先行研究では、主に生徒の科目選択および進路選択の在り様に対して分析の焦点が当てられている。三戸 (2001) は、ある総合学科における生徒の進路意識の変化を類型化し、その変化の過程を分析した結果、入学時点において不明確な進路意識しかもたない生徒が早期に進路決定を迫る科目選択制に直面することで、焦燥感から自らの関心を明確化することなく暫定的な進路選択をしてしまうことを明らかにした。このことから三戸は、選択制カリキュラムが、入学時点で明確な進路意識をもつ非常に限定された生徒にとってのみ有効なシステムとして機能していることを指摘している。また、荒川 (2009) は、偏差値ランクの異なる総合学科および総合選択制高校における生徒の科目選択、進路展望を比較検討し、上位校では大学入試を意識した業

績主義的な科目選択が行われる一方、中・下位校では「興味・関心」に基づく非業績主義的な科目選択が行われる傾向にあることを実証した。この結果に基づき、荒川は、選択制の拡大が学校階層構造の位置づけによって異なって解釈され、実施されていると述べている。

これらの先行研究は、「科目選択」というプロセスを通してカリキュラムが生徒の進路形成にどのような役割ないし機能を果たしているのかを検討している点で問題関心を共有している。本所（2008）は「日本の高等学校においては、科目を強調する履修方式は『科目選択制』として『選択』とともに語られる傾向にある」（11頁）と指摘しているが、こうした傾向は生徒の進路形成に対してもつ科目選択制の「配分機能」に関心が向けられていることに起因している、と考えることができる。

しかし近年、大幅な科目選択制は総合学科だけの特色とはいえなくなってきた。すなわち、高校教育の多様化が進展する状況において、普通科や専門学科でも幅広い選択科目および選択肢を設置する総合選択制が導入される一方、コース制のような限定的な選択肢しかもたない総合学科が現れるなど、さまざまな形態の選択制カリキュラムが拡大・拡散しているのである（山田 2006）。このような多様な形態の選択制カリキュラムの拡大ないし拡散の背景には、普通科と専門学科の差異性の低下という動向がある。横井（2008）が指摘しているように、高卒労働市場の縮小と高等教育への進学率の上昇によって職業生活への移行過程における高校教育の位置が変化し、専門高校においても狭い意味での職業人養成を越えた教育内容の設定が求められ、また普通高校においても専門コースないし専門科目の導入が進められているのである。パイオニアとしての総合学科の選択制カリキュラムは、このような普専の差異性低下の動向を顕著に反映しているといえることができるだろう。それだけに、総合学科の選択制カリキュラムについては、科目選択の「仕組み」および「機能」と同様に、選択される科目の「構成」および「内容」にも分析の目を向ける必要がある。とくに、「普通科と専門学科という枠にとらわれない、生徒による選択を主体としたカリキュラム」の意義は、それを経験した学習者の視点から検討されなければならない。というのも、普専の差異性の低下はカリキュラムの内容と進路との対応関係の変化を示しており、「～を学ぶことで…の進路が開けてくる」という教育内容の有意性をカリキュラムが明示し難くなっていることを表しているからである。したがって、選択制カリキュラムにおいて普通科目と専門科目のそれぞれが学習者にどのような有意性を示しうるかは、それを経験した学習者の意味づけの在り様に一定程度依存するものと想定することができる（岡部 2005）。しかし、学習者の科目選択および進路形成についての研究と比べて、カリキュラムの構成そのものを学習者がいかに解釈し、その有意性をどのように認識しているのかについては十分な議論がなされていない。

そこで本研究では、選択制カリキュラムにおける普通科目と専門科目の位置づけに着目し、総合学科の卒業生が自らの経験した普通教育および専門教育にどのような有意性を見出しているかについて、実証的に解明することとする。本研究が卒業生を研究対象とする理由は、選択制カリキュラムの中・長期的な意義と課題の解明を試みるためである。ここでいうカリキュラムの「中・長期的な意義」とは、あるカリキュラムを経験した学習者によって事後的、反省的に認識された教育の意義を示している。こうした意義の認識は当該学習者すべてに一様に現出するものではなく、その学習者が卒業後どのような状況に置かれているかによって異なってくる。その点で、カリキュラムのもつ意義は多様かつ流動的であるといえる（田中 2001）。このようなカリキュラムの意義の多様性、流動性を踏まえると、卒業生調査は、誰にとって、いかなる点において、選択制カリキュラムが意義をもちうるのか把握する上で有効な手法たり得ると考える。

## 2. 調査の対象と方法

### (1) 調査対象と方法

本研究では、X 県の総合学科の卒業生に対して実施された調査によって得られたデータを使用する。この調査は X 県教育委員会が企画、実施したものであるが、筆者らは本調査の担当部局からの要請を受けて質問紙の作成および調査結果の分析に携わった。質問紙は、主に「総合学科での学習で評価すべき点」(14 の質問項目)「科目選択の基準」(13 項目)「総合学科での学習経験が進路先でもつ有意性」(7 項目)の3つの観点から設問が構成され、それぞれの項目に対して5件法による回答を求めた。

調査は次の手順で実施された。X 県には2010年度現在で13校の総合学科が設置されているが(すべて公立高校)、そのうちすでに卒業生を輩出している9校を調査対象校として選定。2004(平成16)～2008(平成20)年度の卒業生から各対象校の卒業生数に応じて調査対象者数を割り当て、合計で1,193名を調査対象者として抽出し、2009年8～9月、郵送法による質問紙調査を実施した。その結果、230名から回答を得た(回収率19.3%)。

### (2) 調査対象校の概要

ここで、調査対象校9校の概要を述べておきたい。

9校はいずれも学校階層構造において相対的に中下位に位置する、いわゆる進路多様校である。今回の質問紙調査において回答者の進路状況を調べたところ、高校卒業時点での大学進学者、専門学校進学者、就職者の割合が、それぞれ約1/3ずつを占めていた。

表1は、9校の主な特徴を整理したものである。これを見ると、9校はいずれも普通科単独校あるいは普通科+専門学科からの改編校であることがわかる。普通科を中心に、農業科、商業科からの改編が多いことが特徴的である。このことは、各校が設置している系列の内容に反映されている。ちなみに、総合学科における「系列」とは、生徒が科目を選択する上での目安となるように設置された相互に関連する科目のまとまりのことであり、「総合選択科目群」とも呼ばれる。基本的には科目の“カテゴリー”であり、学科やコースのように生徒の科目選択に対して制度上規定力をもつわけではない。この系列の種類、系列を構成する教科・科目の内容は、前身校の特徴、学校の既有資源の状況を色濃く反映しており、表1を見てみると、9校いずれも人文科学、自然科学といった普通科に対応した系列を設置する傾向にある。また、専門学科に対応した系列として、商業系、農業系その他、福祉系、生活(家庭)系、情報系などが多く設置されている点にも、カリキュラム上の特徴を見出すことができる。

表1 調査対象校の概要

学校名	総合学科 開設年度	前身	1学年 学級数	設置系列	総合選択科目数 自由選択科目数
A 高校	H15	普通科	3	人文・国際 / 理数・自然科学 / ビジネス・メディア / 健康・スポーツ / 生活・芸術	69 5
B 高校	H13	普通科	8	ナチュラルサイエンス (自然科学系) / ヒューマンサイエンス (人文科学系) / グローバルサイエンス (国際教養系) グローバルビジネス (流通ビジネス系) / グローバルインフォメーション (情報システム系) / ライフアート (生活文化系) / ライフサポート (健康福祉系)	133 31
C 高校	H12	普通科 農業科 酪農科	4	文理 / 地球環境 / 酪農科学 / 食品科学 / アグリビジネス	50 10
D 高校	H9	普通科 酪農科	4	人文科学 / 自然科学 / 情報ビジネス / 人間生活 / 生産技術	55 23
E 高校	H16	普通科 商業科	3	人文 / 自然科学 / 情報ビジネス / 生活福祉	57 10
F 高校	H14	普通科 農業・生活科	3	人文科学 / 自然科学 / 生物生産 / 郷土・環境 / 生活・教養	52 6
G 高校	H18	普通科と商業 科の統合再編	5	人文科学 / 自然科学 / 生活文化 / 総合ビジネス / 情報ビジネス	65 24
H 高校	H11	普通科 家政科	4	文理総合 / 食文化 / 生活福祉 / 情報ビジネス / 地域・国際	86 13
I 高校	H12	普通科 商業科	3	人文科学 / 自然科学 / 情報 / 観光ビジネス / 人間生活	61 10

### 3. 分析の視点

先に述べたように、総合学科は、普通科と専門学科という枠にとらわれない、生徒による選択を主体としたカリキュラムをその特徴の一つとしている。総合学科の選択制カリキュラムにおいて、学習者は普通科目と専門科目のいずれに対しても“接近可能性”をもっている、と言い換えることもできるだろう。これは、科目履修という点で普通教育と専門教育が分化されてきたこれまでの高校カリキュラムとは異なる形態である。それゆえ総合学科の問題は、この普通科目と専門科目のいずれにも接近を可能とするカリキュラムの形態が、両科目間にある従来の境界に“抵触する”ことになる点にある。普通科目と専門科目をそれぞれ「普通科の内容」「専門科の内容」とするのではなく、いずれも同等に選択可能なものとして提示することは、いわゆる普専の区別を緩め、教育内容の有意性に関する卒業生の認識に「いろいろと選択してきたが結局自分は何を学んだのだろうか」といった類のあいまいさを作り出さるのである (Whitty 訳書 2004、39-64 頁)。それでは、こうしたあいまいさに対処するような仕組み

が総合学科の選択制カリキュラムのなかに組み込まれているのだろうか。この仕組みは、教育内容の有意性に関する卒業生の認識枠組をいかに規定しているのだろうか。

本研究では、この問いを解くための分析の視点として、生徒が科目を選択する上での目安として設定されている「系列」の役割に着目することとした。ここで系列に着目する理由は、系列が単なる科目のカテゴリーではなく、「何を選択し、学んできたのか」に関する卒業生の認識枠組の形成に対して潜在的な規定力をもっていると想定されるからである。

この点について、バーンステイン (Bernstein, B.) の「教育知識の分類と枠づけの理論」は示唆的である。バーンステインは、教育関係において伝達され獲得される知識の基本構造を分析する上で、分類 (classification) と枠づけ (framing) という概念を提示している。分類とは内容間の境界の維持の程度を表している。分類が強ければ内容間は強い境界によって互いに分離され、分類が弱ければ内容間の分離は弱くなる (Bernstein 訳書 1985、94 頁、2000、41-44 頁)。国語、数学、理科などは教科のカテゴリーであるが、分類が強いところではこれらの教科は互いに明確に区別されて提示される。逆に分類の弱いところでは、より領域横断的に提示されることになる。一方、枠づけは、伝達・獲得しうる知識の選択、順序づけ、ペース、評価基準に関して、伝達者と獲得者が手にし得る統制の幅を示す。強い枠づけでは伝達者 (教師) の側が選択、順序、ペース配分、評価基準にわたって統制し、弱い枠づけでは獲得者 (生徒) の側がより多くの統制を有する (Bernstein 訳書 1985、94-95 頁、2000、50-54 頁)。

分類と枠づけの理論に基づくならば、総合学科の選択制カリキュラムは、生徒が多くの科目を選択することから、すなわち知識の選択について獲得者がより多くの統制を有していることから、枠づけの弱化したカリキュラムであるといえることができる。しかし一方で、総合学科のカリキュラムにおいて、選択される科目群は系列という属性のもとに分類されている。しかも、この分類は普通科目と専門科目との間の強い境界をもっていた前身校の教育内容と関連している。このことは、枠づけの弱い総合学科のカリキュラムにおいても系列によって普通科目と専門科目の間の強い分類が維持されている可能性を示唆している。問題は、こうしたカリキュラムの形態が、卒業生の選択制カリキュラムの意味付与にいかなる作用を及ぼしているかである。

そこで以下の分析では、バーンステインから得た上記の示唆に基づいて、どの系列科目を主に選択したかによって卒業生の選択制カリキュラムへの意味付与に何らかの差異が生じるのかどうか、まずはこの点に焦点を当ててみよう。ここでの仮説は次のとおりである。

①総合学科では、系列を通して普通科目と専門科目が互いに属性の異なる教育内容として区別されて提示されており、普通科目系列を主に選択した卒業生と専門科目系列を選択した卒業生との間に、教育内容の有意性の認識の点において差異が生じるのではないか。

②しかし、この認識の差異は枠づけの弱体化に伴う選択幅の拡大から緩やかなものとなり、教育内容の有意性の認識において、卒業生の間に共通の側面が見出せるのではないか。

上記の仮説を検証するため、分析に先立ち、次の方法で独立変数を設定した。調査では卒業生に「主に選択した系列または科目の分野」について聞いているが<sup>(2)</sup>、この回答結果を「普通科目群 (系列) 中心の選択」「専門科目群 (系列) 中心の選択」で大別。さらに、前身校の教育内容との関連性を考慮に入れるため、それぞれを前身校からの継承系列と総合学科改編後の新規開設系列に分類し、「系列区分」として変数化した。表2は各系列区分の構成である。なお、新規開設系列は、すべて専門科目系列選択者によって構成された。

表2 系列区分の構成

系列区分	系列名 (%)
前身校継承系列(普通)(n=61)	人文科学・社会科学 (72.1)      自然科学 (27.9)
前身校継承系列(専門)(n=35)	ビジネス・商業 (40.0)      農業 (20.0)      情報・メディア (17.1) 食・食品 (14.3)      人間・生活・文化・芸術 (8.6)
新規開設系列 (n=116)	ビジネス・商業 (22.4)      スポーツ・健康 (19.0)      福祉 (19.0) 情報・メディア (11.2)      国際 (8.6)      人間・生活・文化・芸術 (8.6) 地域・環境 (6.0)      食・食品 (5.2)

#### 4. 調査結果

##### (1) 普通科目と専門科目の間の境界

ここではまず、「科目選択の基準」の観点から卒業生が総合学科のカリキュラムのどの側面に有意性を見出しているのか、その特徴を整理することから始めたい。「科目選択の基準」は卒業生が科目選択の際に何を重視したかを表しており、実際に選択した科目(群)に対して卒業生が付与した有意性であると考えることができる。本研究では、科目選択の基準を測るための項目として13項目を設定し、これらの項目に対して因子分析を施した。その結果が表3である。

表3 「科目選択の基準」に関する因子分析結果(主因子分析結果、プロマックス回転後)

	1	2	3	4
就職に役立つ科目を選択するようにした	.977	-.221	-.033	-.106
資格を取得することができるような科目を選択した	.634	.051	.024	-.051
将来就きたい仕事に必要な知識・技能を身に付けられる科目を選択するようにした	.553	.351	-.211	-.005
進学と就職のどちらにも役立つような科目を選択するようにした	.498	.014	.194	.281
自分の長所や得意分野を活かせそうな科目を選択するようにした	-.118	.662	.098	-.008
特定の系列の専門科目を選択するようにした	-.036	.643	-.070	.057
自分の興味関心に合った科目を選択するようにした	-.038	.632	-.048	-.101
実習や作業が取り入れられている科目を選択するようにした	.189	.479	.246	-.039
単位が取りやすそうな科目を選択するようにした	.054	.018	.753	-.047
親しい友人が選択している科目を選択した	.021	.139	.641	.074
とくに理由もなく、何となく選択した	-.074	-.133	.574	-.118
希望する大学の受験に必要な科目を選択するようにした	-.030	.087	-.131	.836
普通科目を中心に選択するようにした	.001	-.302	.100	.491

因子分析の結果、4因子が析出された。この結果をもとに各因子の性格づけをすると、第1因子については就職や仕事、資格に関する項目が並んでいることから「就職・職業志向」の因子とみなすことができる。第2因子については興味関心に関する項目が見られることから「興味・関心志向」の因子、第3因子については友人の影響や単位取得のしやすさと関連していることから「他律志向」の因子、第4因子については大学受験と関連していることから「進学志向」の因子と、それぞれ解釈した。

次に、ここで得られた因子について、「主に選択した系列」によって因子得点の平均が異なるかどうか

かを調べるために、各因子に対して系列区分をグループ分けとする一元配置分散分析を施した。その結果が表4である。

表4 系列区分ごとの平均因子得点の比較①（一元配置分散分析）

	I. 前身校継承系列 (普通) (n=60)	II. 前身校継承系列 (専門) (n=34)	III. 新規開設系列 (n=116)	IV. その他 (n=14)	検定
就職・職業志向	8.65	11.98	11.49	9.38	F(3,219)=11.705**
興味・関心志向	11.21	12.94	12.62	11.07	F(3,220)=4.945**
他律志向	5.10	6.13	5.91	5.02	F(3,220)=2.288
進学志向	5.51	3.65	4.12	5.50	F(3,218)=14.173**

\*\* p<.01

一元配置分散分析の結果、「就職・職業志向」因子、「興味・関心志向」因子、および「進学志向」因子について、1%水準で有意な主効果が見られた。多重比較の結果、「就職・職業志向」については、前身校継承系列（専門）および新規開設系列の因子得点平均値が、前身校継承系列（普通）を有意に上回っていた。それに対して「進学志向」については、前身校継承系列（普通）の得点平均値が前身校継承系列（専門）および新規開設系列よりも有意に高く、「就職・職業志向」とは逆の結果となった。表2で確認したように、前身校継承系列（専門）および新規開設系列を構成する科目群がいずれも専門科目であることから考えて、以上の結果は、選択した科目の有意性の認識レベルにおいて普通科目と専門科目との間に一定の境界が維持されていることを表している。すなわち、普通科目は学習者の進学への志向性に、専門科目は就職や職業への志向性に、それぞれ対応するものとして区別され、認識されているのである。

ここで興味深いのは、「興味・関心志向」因子について、1%水準で有意な主効果が見られる点である。多重比較の結果、前身校継承系列（専門）と新規開設系列の因子得点平均値が前身校継承系列（普通）を上回っていた。これは、普通科目系列を主に選択した卒業生と比較して、専門科目系列を選択した卒業生の方が自らの選択した科目群を「興味・関心」の観点から意味づけていることを表している。専門科目と「興味・関心」とのこのような親和性は、表3の因子分析結果においても見いだすことができる。表3を見てみると、「特定の系列の専門科目を選択するようにした」という項目は「興味・関心志向」を示す項目と同一の因子軸に含まれている。ここからも、卒業生が系列の専門科目を「興味・関心」の観点から意味づける傾向にあることがわかる。

以上の分析結果から、先ほどの仮説①が検証されたということが出来る。すなわち、系列区分を独立変数としたとき、普通科目系列を主に選択した卒業生と専門科目系列を選択した卒業生との間には、就職・職業志向、進学志向、興味・関心志向をめぐって自らの選択した科目群の有意性の認識に差異が生じていた。総合学科の選択制カリキュラムにおいても普通科目と専門科目の間の境界は維持され、系列を通して卒業生の認識を規定しているのである。

ところで、就職・職業志向および進学志向という進路への志向性と、興味・関心という即時的な欲求の充足に対する志向性とは、選択した科目の有意性を認識する上での観点の位相が異なっている。因子分析の結果によると、とくに専門科目に対しては、興味・関心の充足という進路とは異なる観点からの意味づけがなされていた。これは、専門科目での学習経験とその後の進路との直接的な関係が弱化していることを示唆している。それでは、総合学科の選択制カリキュラムにおいて、専門科目はどのよう

な役割を果たしているのだろうか。次は、この点について「総合学科での学習経験が進路先でもつ有意性」の観点から分析し、先の仮説②を検証してみよう。

## (2) 選択制カリキュラムにおける「一般有意性」と「専門有意性」

ここでは、「総合学科での学習経験が進路先でもつ有意性」の観点から、卒業生が総合学科のカリキュラムのどの側面に有意性を見出しているのかについて検討を加える。この「進路先での有意性」は、卒業生が現在の状況において認識した総合学科での学習経験の“役立ち感”であり、カリキュラムの中・長期的効果の一端を表していると解釈することができる。と同時に、総合学科のような枠づけの弱化したカリキュラムにおいて専門科目が果たす役割、という前節の問いについて一定の解答を与えてくれるのではないだろうか。

本研究では、まず進路先での有意性を測るための項目として7項目を設定し、これらの項目に対して因子分析を施した。その結果、表5にある2因子が析出された。第1因子には総合学科の原則必修科目「産業社会と人間」<sup>(3)</sup>や普通科目、学習スキルに関する項目が並んでいる。これらは総合学科において学習者が経験する事項のうち、特定の専門分野に属さない一般教育的な側面を表していることから、「一般有意性」の因子と命名した。第2因子については、専門科目や資格に関する項目が並んでいることから「専門有意性」の因子として解釈した。

表5 「総合学科での学習経験が進路先でもつ有意性」に関する因子分析結果（主因子分析結果、プロマックス回転後）

	1 (一般有意性)	2 (専門有意性)
体験的な学習で学んだプレゼンテーションや研究の方法	.858	-.152
シラバスの見方や学習内容の選び方	.703	.074
普通科目で学んだ知識や技術	.565	.098
「産業社会と人間」などで学んだ仕事や社会に関する知識	.545	.174
高校在学中に取得した資格	-.116	.804
さまざまな自由選択科目で学んだ知識や技術	.101	.759
系列の専門科目で学んだ知識や技術	.101	.618

次に、これらの因子について系列区分をグループ分けとする一元配置分散分析を施し、「主に選択した系列」間での因子得点平均値の差異を調べた。その結果が表6である。一元配置分散分析の結果、「一般有意性」因子については、系列区分間で有意差は見られなかった。その一方、「専門有意性」因子については1%水準で有意な主効果が見られた。多重比較の結果、前身校継承系列（専門）および新規開設系列の因子得点平均値が、前身校継承系列（普通）を上回っていた。

表6 系列区分ごとの平均因子得点の比較②（一元配置分散分析）

	I. 前身校継承系列 (普通) (n=60)	II. 前身校継承系列 (専門) (n=34)	III. 新規開設系列 (n=116)	IV. その他 (n=14)	検定
一般有意性	10.39	9.86	9.49	8.12	F(3,212)=2.257
専門有意性	<u>6.10</u>	<b>8.05</b>	<b>7.45</b>	<u>4.62</u>	F(3,212)=10.561**

\*\* p<.01

続く図1は、「主に選択した系列」によって「一般有意性」および「専門有意性」に対する認識がどのように異なっているかを見るために、両有意性の得点を座標軸とする平面上に系列区分、および系列区分を構成する系列をプロットしたものである。これを見ると、人文科学・社会科学、前身校継承系列（普通）、自然科学および地域・環境が「一般有意性」に偏る傾向があるのに対し、情報・メディア、ビジネス・商業、前身校継承系列（専門）および人間・生活・文化・芸術は「専門有意性」に偏る傾向にあることがわかる。これらは、前節の分析によって見出された「普通科目—専門科目間の境界の維持」を追認する結果となっている。

図1 「一般有意性」「専門有意性」得点の系列区分別・系列別プロット

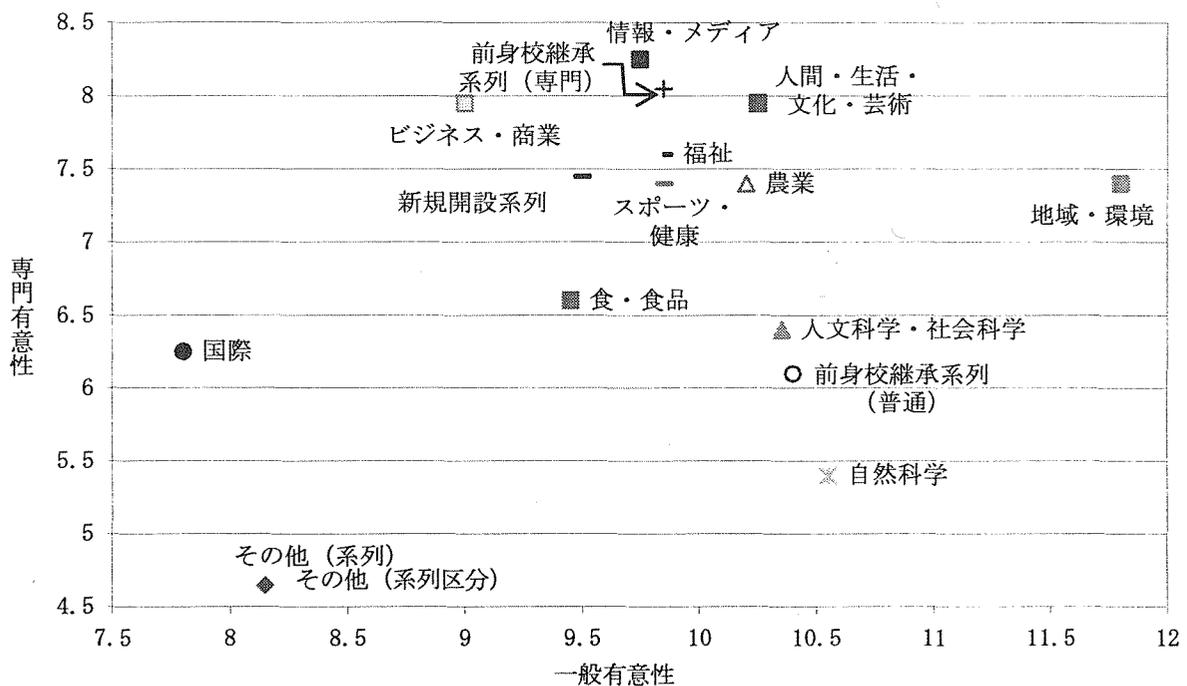


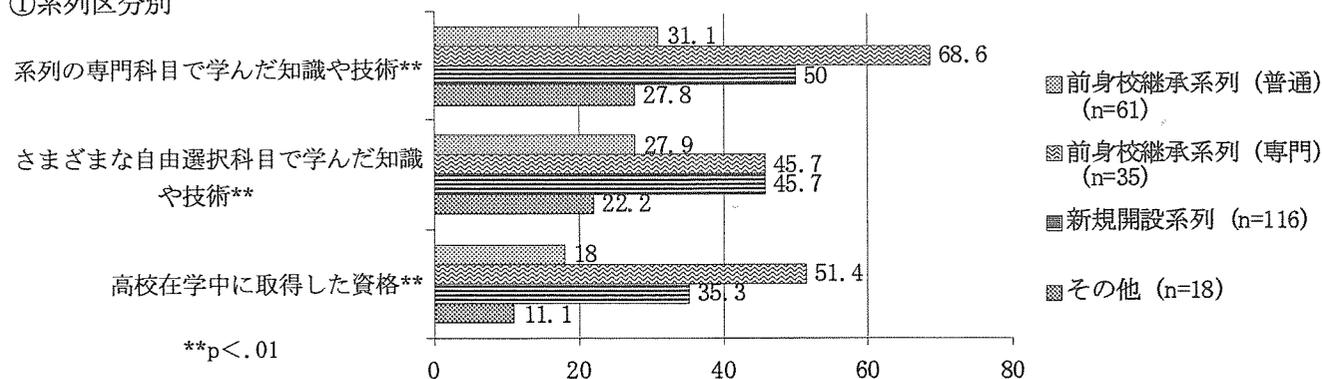
図1において留意する必要があるのは、「専門有意性」に対する認識のばらつきである。サンプル数の少ない地域・環境、国際、その他の各系列を除き、「一般有意性」および「専門有意性」の得点平均値の最低値と最高値の差を調べてみよう。「一般有意性」については最高値が自然科学の10.56、最低値がビジネス・商業の9.01で、その差が1.55であるのに対して、「専門有意性」については最高値が情報・メディアの8.22、最低値が自然科学の5.35で、差が2.87と大きくなっている。つまり、「一般有意性」に対して「専門有意性」は得点の分散が相対的に大きく、卒業生によって「専門有意性」の認識にばらつきが生じているのである。それでは、総合学科の選択制カリキュラムのもつ「専門有意性」は、誰にとって“有意”なのであろうか。

この点を明らかにするために、「専門有意性」の設問についての肯定的回答の割合<sup>(4)</sup>を、系列区分別、進路別に比較した。その結果が、図2①および②である。系列区分別とともに進路別の比較を行った理由は、ここで析出され、卒業生に認識されている「専門有意性」があくまでも進路先での有意性だからである。前節の分析において、普通科目系列を主に選択した卒業生は「進学志向」の観点から、専門科目系列を選択した卒業生は「就職・職業志向」の観点から、それぞれ選択科目の有意性を認識していることが明らかになった。この「普通科目—専門科目間の境界」は進路先での「専門有意性」の認識においても維持されているのか、確認しておく必要がある。

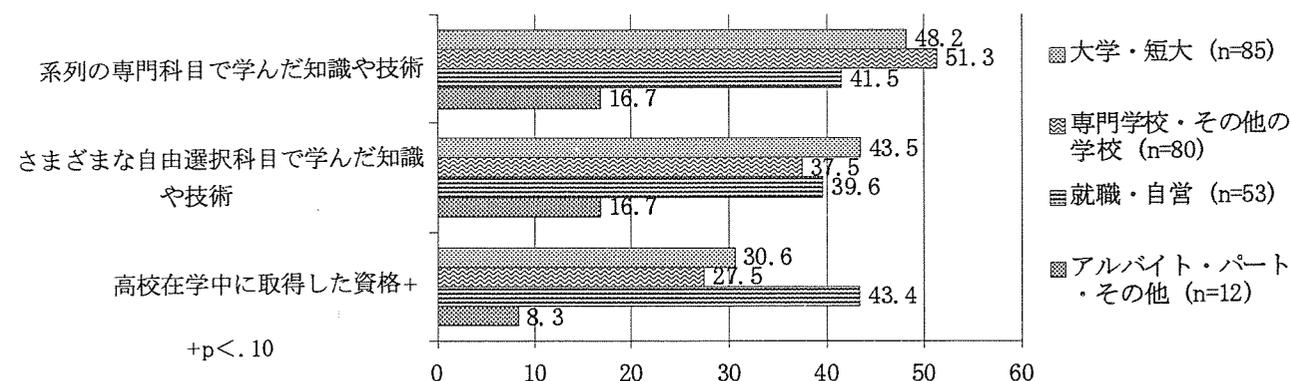
図2①をしてみると、「専門有意性」を設問のいずれにおいても前身校継承系列（専門）および新規開設系列で肯定的回答の割合が有意に高いことがわかる。とくに「系列の専門科目で学んだ知識や技術」の有意性の認識については、前身校継承系列（専門）で7割近くに達しており、専門科目系列の選択者が進路先においてもその学習経験を生かす機会を得ているものと推測される。

図2 「専門有意性」に関する回答割合（%）

①系列区分別



②高卒時の進路別

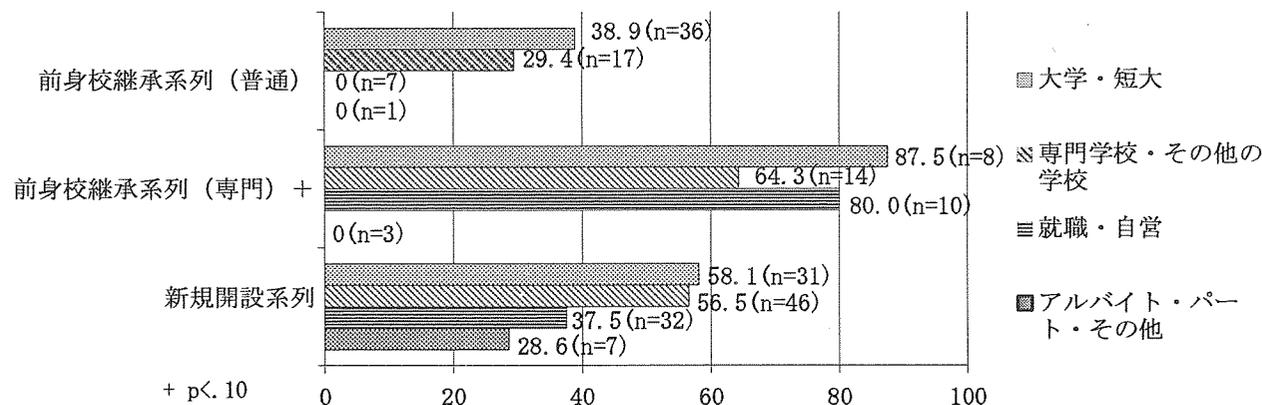


ところが、こうした認識の差異は、進路別の比較において消滅することとなる。図2②からわかるように、「系列の専門科目で学んだ知識や技術」「自由選択科目で学んだ知識や技術」の両項目について進学者と就職者のそれぞれ約4~5割が肯定的に回答し、両者間の認識に有意差を見出すことはできない。「高校在学中に取得した資格」について10%水準の傾向差が見られるのみである。これは、選択制カリキュラムの専門科目に有意性を見出している層が、進学者と就職者のいずれにおいても一定程度存在することを示しており、上記の「進学志向」と「就職・職業志向」をめぐる「普通科目—専門科目間の境界の維持」とは異なる結果となっている。

この点をさらに確認するため、各系列区分内での進路別に「系列の専門科目で学んだ知識や技術」の有意性の認識について回答割合を調べた。その結果が図3である。これを見ると、いずれの系列区分においても、進学者—就職者間に統計的な有意差を見出すことはできず、サンプル数のもっとも少ない前身校継承系列（専門）において10%水準の傾向差が見られるのみであった。しかも、いずれの系列区分においても、就職者よりも大学および短大進学者の方が専門科目の有意性を認識している割合が高い。このことは、普通科目と進学志向、専門科目と就職・職業志向との対応関係が、選択制カリキュラムの「専門有意性」の認識においては低下し、相対化されていることを表している。系列区分×進路の個々

のサンプルが少ない点を銘記しておかなければならないが、枠づけの弱化したカリキュラムは、進学と就職いずれの進路を選択した卒業生に対しても「専門有意性」を認識する契機を共通に開いている、ということが出来るであろう。

図3 「専門科目で学んだ知識・技術」の有意性に関する回答割合（系列区分ごとの進路別割合）（%）



以上の分析結果から、先に示した仮説②「有意性の認識において、卒業生の中に共通の側面が見出せるのではないかと」が部分的に検証されたということが出来る。ここで「部分的に」と限定を設けるのは、「専門有意性」に対する認識の共有が、あくまでも一部の学習者に開かれた可能性にとどまっているからである。例えば図3を見てみると、前身校継承系列（普通）での「専門有意性」の認識の割合そのものが総じて低くなっていることがわかる。選択制カリキュラムにおける「専門有意性」の認識は、「普通科目—専門科目間の境界」が維持されたなかで、部分的に—とくに専門科目を経験した高等教育進学者の間において—共有されているのである。

### 5. まとめと課題

ここまで得られた知見をまとめよう。本研究では、総合学科の卒業生が自らの経験した普通科目および専門科目にいかなる有意性を認識しているのか、その認識が普通科目と専門科目のいずれにも接近可能なカリキュラムの形態とどのように関連しているのか、について検討してきた。分析の結果、次のようなことが明らかになった。

第一に、「主に選択した系列または科目の分野」をもとに卒業生を系列区分に分類し、各系列区分で有意性の認識にどのような差異が生じるかを調べた。その結果、普通科目系列を主に選択した卒業生は進学の観点から、専門科目系列を選択した卒業生は就職や職業の観点から、それぞれ自らの選択した科目群に有意性を見出していることが明らかになった。これは、総合学科の選択制カリキュラムにおいても普通科目と専門科目の間の境界が系列による両科目のカテゴリー化を通して維持され、学習者の有意性の認識を顕在的・潜在的に規定していることを表している。バーンスティンの概念に基づくならば、総合学科のカリキュラムは、科目選択制を取り入れることによって表層の部分で枠づけを弱化させながら、深層の部分で系列を通して普通科目—専門科目間の強い分類を維持しているということが出来るだろう。

表層部分での枠づけの弱化は、専門科目と「興味・関心志向」との親和性においても確認することができる。因子分析の結果、卒業生は専門科目について、進路実現の観点からではなく興味・関心の充足の観点から有意性を認識していた。以上の結果から、総合学科の選択制カリキュラムは、主に専門教育

の側面で進路との直接的な対応関係を弱めながら、普通科目—専門科目間の境界を一定の強度をもって維持していると捉えることができる。

第二に、専門科目での学習経験が進路先でもつ有意性を本研究では「専門有意性」と呼んだが、この「専門有意性」の認識について、就職者と高等教育進学者との間に有意な差がなく、進学者においても専門科目での学習経験に一定の有意性を見出していることが明らかになった。総合学科の選択制カリキュラムは、学習者に普通科目と専門科目のいずれに対しても接近可能性を提供しているのであるが、このことが結果として、進学と就職いずれの進路を選択した卒業生に対しても共通に「専門有意性」を認識する契機を開くことにつながっているのである。

この結果は同時に、総合学科の選択制カリキュラムが、普通科目—専門科目間の境界の再構成の契機を内包していることをも表している。バーンステインは教育実践の変化の契機について、「何らかの点で枠づけを弱めることは分類を破壊する方向に向かう。だから変化が生じる可能性は枠づけのレベルにある」(Bernstein 訳書 2000、56 頁)と述べているが、本研究の結果から、枠づけの弱化による普通科目と専門科目の分類の変化の萌芽を読み取ることができるのではないだろうか<sup>(5)</sup>。

最後に、以上の分析結果から導き出される今後の研究課題として、高等教育進学者および進学希望者にとって中等教育段階での専門教育がいかなる有意性をもたらすのか検討する必要があることを指摘しておきたい。本研究において、進学者が専門科目に有意性を見出していることは明らかになったが、いかなる点で、またどういった分野において有意性が認識されているのか、その詳細を検討することはできなかった。また、専門科目に対する有意性の認識が高等教育進学後の学習経験を通して事後的になされたものなのか、あるいは専門科目の有意性を認識できる層の卒業生が高等教育に進学したのか、その関連性も問われなければならない。こうした課題を検討することによって、進路との直接的な対応関係が低下した状況における中等教育段階の専門教育の位置づけ、役割について考察を進めることができるだろう。今後の課題としたい。

付記：データの使用については、X 県教育委員会の了解を得た。

#### <注>

(1) 本研究では「有意性」(relevance) について、ブルーナー (Bruner, J. S.) の「教育のレリヴァンス」の見解に依拠して「うける教育の内容が自己と社会との双方の核心と結合しているかどうか」(Bruner 訳書 1972、205 頁)、すなわち教育内容が個人ないし社会に対してもつ有意性、関連性、意義を表す概念として用いている。ある教育内容について、学習者ないし学習者の周囲がそれを何らかの形で「学ぶに値するもの」と見なしたとき、その教育内容は「誰か」にとって「レリヴァントな」教育内容となる。

なお、本田 (2005、2009) はレリヴァンスについて「意義」という訳語を当てているが、本研究では学習者によるカリキュラムの「意味」付与の側面に焦点を当てることから「有意性」という訳語を用いることとした。

(2) この質問項目では、工藤文三研究代表 (2008a) で使用された質問項目を参照し、調査対象校の教育内容を考慮して、14 の選択肢から一つを選び回答するよう求めた。さらに調査対象校の設定系列の類似性の観点から選択肢を整理し、最終的に 12 の系列項目を設定した。回答結果は以下のとおりである。(括弧内の数値は%。n=230)

人文科学・社会科学 (19.1) ビジネス・商業 (17.4) スポーツ・健康 (9.6) 福祉 (9.6) 情報・

メディア (8.3) 自然科学 (7.4) 人間・生活・文化・芸術 (6.0) 食・食品 (4.8) 国際 (4.3)  
 地域・環境 (3.1) 農業 (3.0) その他 (7.4)

(3)「産業社会と人間」とは、科目選択および進路選択のためのガイダンス科目であり、総合学科において主に1年次の原則必修科目となっている。職場体験や社会人講話、科目選択ガイダンス等が行われており、これらの活動を通じて生徒は将来を見越した科目選択をするよう促される。

(4)この回答割合は、当該項目について「進路先でどの程度生かされているか」を5件法で質問した結果であり、「とても生かされている」「まあ生かされている」に回答したものの合計。

(5)ただし、すでに指摘したように、「専門有意性」の認識の共有は普通科目—専門科目間の境界が維持されたなかでの部分的、限定的なものであり、それゆえ分類の変化についても潜在的な“萌芽”のままである点を留意しておく必要がある。

### 引用・参考文献

- ・荒川葉 (2009)『「夢追い」型進路形成の功罪 高校改革の社会学』東信堂
- ・Bernstein, B. (1978) 萩原元昭編訳 (1985)『教育伝達の社会学 開かれた学校とは』明治図書
- ・Bernstein, B. (1996) 久富善之他訳 (2000)『<教育>の社会学理論 象徴統制、<教育>の言説、アイデンティティ』法政大学出版局
- ・Bruner, J. S. (1971) 平光昭久訳 (1972)『教育の適切性』明治図書
- ・本田由紀 (2005)『若者と仕事 「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会
- ・本田由紀 (2009)『教育の職業的意義—若者、学校、社会をつなぐ』ちくま新書
- ・本所恵 (2008)「スウェーデンの総合制高等学校における教育課程改革—履修方式の転換に焦点をあてて—」『カリキュラム研究』第17号、1-14頁
- ・工藤文三研究代表 (2008a)『今後の後期中等教育の在り方に関する調査研究（「総合学科に関する調査」報告書）』
- ・三戸親子 (2001)「総合学科における生徒の進路意識形成」『教育社会学研究』第69集、103-123頁
- ・岡部善平 (2005)『高校生の選択制カリキュラムへの適応過程—「総合学科」のエスノグラフィー—』風間書房
- ・田中統治 (2001)「教育研究とカリキュラム研究—教育意図と学習経験の乖離を中心に—」山口満編著『現代カリキュラム研究 学校におけるカリキュラム開発の課題と方法』学文社、21-33頁
- ・Whitty, G. (2002) 堀尾輝久、久富善之監訳 (2004)『教育改革の社会学 市場、公教育、シティズンシップ』東京大学出版会
- ・山田朋子 (2006)『高校改革と「多様性」の実現』学事出版
- ・横井敏郎 (2008)「高校教育改革の現段階とその評価」工藤文三研究代表 (2008b)『今後の後期中等教育の在り方に関する調査研究（最終報告書）』307-321頁

## Perceptions of the Relevance of General and Specialized Subjects in *Sogo Gakka* Senior High Schools: An Analysis Based on a Survey of High School Graduates

Yoshihei OKABE

(Otaru University of Commerce)

The purpose of this paper is to examine the perceptions that senior high-school graduates at *Sogo Gakka* have of the relevance of general and specialized subjects, in order to better understand the elective system of curriculum construction.

In *Sogo Gakka* students choose subjects according to their interests and prospective careers from a list of elective subjects containing both general and specialized subjects. Thus far numerous studies have examined students' subject choices. However, little attention has been paid to how learners give meaning to the contents of the curriculum and how they perceive the relevance of their subjects to their careers.

Therefore, this study analyzes the results of a questionnaire given to graduates of a senior high-school *Sogo Gakka*, focusing on their perceptions of the relevance of general and specialized subjects. Data was collected from 230 respondents at 9 *Sogo Gakka*.

Analyzing the questionnaire, I attended to the function of the *Keiretsu*, which are sets of subjects from which students make their choice. The working hypotheses of this research were as follows: (1) in *Sogo Gakka*, the division between general and specialized subjects would be maintained by the *Keiretsu*. Thus there would be a difference in the perceptions of the relevance of subjects between graduates who had chosen mainly general subjects and graduates who had chosen mainly specialized subjects; (2) even though there would be a difference as above, common aspects of perceptions of relevance would be accounted for by the expansion of the choice of subjects presented to the learners.

I surveyed (i) graduates' opinions about the value of learning in *Sogo Gakka*, (ii) the criteria of graduates' subject choice, and (iii) the relevance of graduates' experience in *Sogo Gakka* to their present studies and work. The following results were obtained.

Firstly, graduates who had chosen general subjects mainly perceived relevance from the viewpoint of entering higher education, whereas graduates who had chosen specialized subjects perceived relevance from viewpoint of getting a job or work. This showed that the division between general and specialized subjects was maintained by the *Keiretsu* in *Sogo Gakka* and regulated the learners' perceptions of relevance.

Secondly, the relevance of experience in specialized subjects to their present circumstances, "specialized relevance", was perceived by both higher education entrants and job entrants. This showed that the curriculum in *Sogo Gakka* provided a common opportunity to perceive "specialized relevance" for graduates whether they entered higher education or got jobs.

These results suggested that the curriculum in *Sogo Gakka* involves a potential for learners to restructure the division between general and specialized subjects.